

●●●●● 特別史跡平城宮跡 第一次大極殿正殿 Q&A ●●●●●

第7回特別公開

■大極殿について

Q：大極殿（第一次大極殿、大極殿院地区）とは？

A：大極殿は、今から約1300年前の奈良時代、西暦710年（元明天皇）に、藤原京から遷都された平城京の北側中央に位置した「平城宮」の中心にあり最も重要な建物で、遷都後の715年に竣工したと考えられています。平城京の造都は古代中国の都市計画を参考にしています。したがって、中国古代天文学と深く結びついている哲理（考え方）を基本にしており、大極殿の名は「太極星（たいきょくせい）」からきています。太極星とは宇宙の中心にある星のことで、「北極星」のことです。大極殿は、天皇の即位式や元日の朝賀のような、国家的儀式に使われました。大極殿は740年の恭仁京へ遷都に伴い移築されましたが、745年に再び平城京に都が戻されてからは、元の位置の東側の区画に置かれました。このように2箇所ある大極殿の遺構を区別するため、最初の大極殿を便宜的に「第一次大極殿」と呼んでいます。大極殿を築地回廊で囲んだ、南北320m、東西180mの範囲を大極殿院地区と呼んでいます。

■大極殿復原工事全般について

Q：復原の目的は何ですか？

A：平城宮跡は、奈良時代の都の遺跡であり、国の特別史跡に指定されています。第一次大極殿は我が国の古代国家成立の時期における中央政府の在り方を示すものであることから、復原整備をすることにより、広く皆さんに貴重な遺跡の往時の姿や歴史的空間を体験してもらい、現在に至るわが国の歴史や意義を理解してもらうためです。

Q：完成はいつですか？

A：2010年完成予定です。

Q：どこが復原工事をしているのですか？

A：国、文化庁です。

Q：当時の設計図は残っているのですか？ 古代通りの復原ですか？

A：今日に伝わっていません（残っていません）。復原にあたっては、発掘調査から分かることや推定されること、また古代建築物として現存する、法隆寺金堂や薬師寺東塔等を参考に、「続日本紀」、「年中行事絵巻」といった多くの歴史資料も参考に、構造（建物の骨組）・意匠（建物の姿や形）において奈良時代の姿に忠実に復原することを目指しています。

■大極殿の詳細について

Q：大極殿の大きさは？

A：東西長さ約44m、南北長さ約19.5m、高さ（棟高）約27m（基壇高さ約3.5mを含む）です。

Q：朱雀門や大仏殿と比べた大きさは？

A：朱雀門よりも大極殿の方が大きく（朱雀門 東西長さ約25m、南北長さ約10m、高さ約22m）、大仏殿よりも大極殿の方が小さいです（大仏殿 東西長さ約57m、南北長さ約50m、高さ約48m）。

Q：柱の大きさや本数は？

A：初重の柱は、直径約71cm、長さは約5m、本数は44本、二重の柱は、直径約59cm、長さは約2.6m、本数は22本で計66本です。

■基壇・礎石について

Q：礎石は残っていたのですか？

A：礎石は残っていませんでしたが、発掘により石材のカケラが見つかりました。また、大極殿跡地からの出土品が極度に少なかったことから、大極殿の建物部材は基礎石から屋根瓦までそっくり恭仁宮に移築されたと考えています。恭仁宮大極殿跡には礎石が残っており、発掘された石材と同じ種類の凝灰岩 竜山石でした。基壇石・礎石は竜山石を使用しています（四隅の礎石は恭仁宮大極殿に倣い花崗岩を使用しています）。

Q：遺構の上にそのまま建てているのですか？

A：遺構を保護するために盛土を行い、遺構面から約80cm上を復原地面として建てています。

■木材について

Q：どんな木を使っていますか？

A：ヒノキとケヤキを使っています。吉野・熊野地方を中心とする国内産です。

Q：なぜヒノキとケヤキを使い分けているのですか？

A：大斗や尾垂木先斗といった特に荷重を受ける組物廻りの部材にはヒノキより硬いケヤキを使っています。これは奈良時代の建物である薬師寺東塔の例に従っています。

■その他

Q：クレーンのなかった当時は、どういう方法で材料を組み立てたのですか？

A：てこの原理などを用いて、人力で組み立てました。いわゆる「滑車」のようなものも使ったことが考えられます。もちろん建設用の足場も立てていたでしょう。発掘現場では直接的な建物のものとは思えない柱穴が良く確認されます。このような柱穴は、建設用の足場用のものと考えられます。

Q：エンタシス（柱のふくらみ）はあるのですか？

A：柱の上部を細めていますが、エンタシスではありません。

Q：釘は使っていますか？

A：鉄釘、銅釘など、釘は古代から用いられています。現存する古代建築や、発掘現場からも大量の釘が出土することがあります。ただしすべて建物の部材を釘で止めているかというと、そうではありません。釘は適材適所に使用されるもので、たとえば、部材双方を組み合わせて止める箇所などは、通常釘を使用しません。垂木等を止める場合に釘は使っていますし、大極殿でも当時の方法を踏襲しています。

Q：耐震性能は、どれくらいですか？

A：阪神大震災程度の地震に対して耐えられるよう計算、設計されています。